

館蔵資料にみる背負い運搬具の諸形態

嶋田 忠一^{*}

はじめに

当館では、約3,600点ほどの民俗資料を収蔵している。その内訳は、既に『収蔵資料目録—民俗—』（昭和56年3月）のなかに記しているものの、その後の追加・補訂はなされないまま、今日に至っている。資料の登録・分類・整理に関する日常の作業は、目録の補追作成があつて、公表され完結するものであるだけに、基本的な活動の遅滞を感じずのものである。そこで本稿では、分類作業の進展に則して、明らかにすべきものの一例として報告するものである。なお、分類方法は諸種知られているが、ここでは磯貝 [1971] および外崎 [1978] に拠り六分類とした。



▲山菜採りのコダシ使用例

1 背負い縄

ニナ・ミナ・ショイナ・ショイナワなどと呼ばれる。館蔵資料はすべて藁製であるが、級の木の皮など樹皮製のものもみられる。二尋～三尋が一般的で、両端部で細く、胸前にかかる中央部で太く、また幅広くなっている。この中央部には、木綿布の裂き紐が織り込まれてもいる。単独で、結束・背負う場合もあるが、おおくは、籠・袋・箱などを固定し、じかに背負ったり、背に当てものをして背負ったりする。

背負い縄と共用されるところから、多くの背中当ての類も、「背負い縄」のタイプとして掲げておく。ヒエナガデ・ネゴ・ネゴゲラ・ワラシト・イタシト・イタヒエナガ・キダラ・ヒゴモ・カシベ・カコロなどと称されるものである。この背中当て類は、形態上いくつかに分けられる。ひとつは、いわゆるネコゲラタイプで、背に当たる部分と肩当ておよび胸当てが一続きの編みでできているものである。このタイプにはさらに、紐の付け方に違いが認められる。それは、胸前にあたる両端を紐でつないだもので、腰の部分に締める腰紐はまた、別になる。これに対し、胸当ての両端から縫りあげた紐縄が左右一本ずつ付くものがある。そして、紐縄が短い場合は胸前で結び一続きのものと同様の使い方をし、長くしたものは、一旦胸前で交差させ、ネコゲラの腰にあたる部分の編み目に通し、腹部で締める用法である。材質は主に藁であるが、ガツギも多く使用される。荷面には、荷ずれを防

* 秋田県立博物館

いだり、荷の無い時の背飾りとして、ガツギの茎を残して見せたり、藁製の床を別にして取りつけるなど、美的な配慮もみられる。また、縁かがりや紐には、木綿の裂き布を混ぜるほか、腰紐全体をカバーするように色のついた布をかぶせたものもある。

さらにもう一方のタイプはシト型である。シト型の基本は、藁で編んだ厚い布団様のものである。単にシトといえば庭囲炉裏の周囲で用いる藁の座布団をいうことから知れる。これに文字をあて、尻当としたものも時折みられる。いわば、シトに紐を付け、背負い用具としたもので、ヒェナガデやワラシトと称されている。一般には藁で、地域によっては麦稈などで、ぴっしりと床を作り、その上から藁や畳表で包み込んで使用する。荷の当たる側には、板をあて、床にしっかり固定するのである。さらに、この床の両脇に、別作りの幅の狭いひれを取りつけたものもある。これは、収穫した稲を田んぼから家まで運び入れるときに用いたもので、稲の芒や葉先などが体に入り込まないようにとの配慮からでたものである。同じシトでも、イタシトと呼ばれるものは、床にあたる部分が一枚の板でできているものをいう。ほとんどの場合、大木の伐根を利用し、しかも柁目ではなく、板目を挽いて、荷ずれ防止のために刻みをいれたものである。そして、上部中ほどに左右一個、下部左右の端に一個ずつ穴を開け、これにヤシマという、藁やガマ製の肩当て紐を通して背負うのである。材質は、主に杉材で、栗や櫟など堅木も良い。しかし、それ自体の重さが加わったり加工に難があるため、杉材が適している。長い間使い込まれたものなかには刻みの角が摩耗し丸くなったり、使った人の背の形に湾曲したものまでみられる。柴や薪・釜木などを運ぶため、ヤシマは、何本も予備を用意して歩いたものという。ヤシマは、編み上げの元を結び止めてから、幅広い肩当て部分を編み、次第に縄編みをして終えたも

のに別に編んだ縄を、編み上げの元に差し込みつけてできあがる。女性用は板の幅が一尺位の小型のもので、男性用は三尺位のものもあり釜木のような重いものを運んだものである。このほかに背中当てとして利用されるものに、ケラやキゴザ（着莫蔭）の類がある。ケラの材質は、ケラクサとも呼ばれるタツノヒゲ、スゲ、マンダ（シナ）、ワラ、ミゴ、ガツギ、ササなどあり、これらを作業用両具、外出用、晴着用などとして使用してきた。キゴザは、文字どおり莫蔭に紐を付け背中当てとしたもので、主に日除けとして使われた。幅の広い、莫蔭そのものに紐をつけたものから背中幅に合わせて仕立て、黒のカナイト（木綿糸）で背模様を縫い綴じたものまである。このタイプはまた、背丈位の長いものも知られている。この用法は、腰のあたりで折り返して使うもので、その分だけ長いことになる。

ところで、先のイタシトにつき、若干の補足をしておくが、それは、荷縄との共用の他に、モタと呼ぶ道具との共同作業があるということである。この作業は、炭焼きのときに行われるもので、釜を築いてから、まず釜木を目勘で四尺位に伐り揃え、モタに掛け渡す。これが、シトの大小に合った重さになったところで、シトを背負った運び手が腰をかがめながら後じさりしてモタのなかに入り込み荷縄を縛りあげ、立ち上がりながらモタのひかえ棒をはずし、運搬することになるのである。こうして、重い生木を、腰を下ろしたりせずに、容易に運べるのである。腰を上げ下ろす場合の二倍、20貫を運ぶという。もちろん女性用はシトも小型のため、そう多くは運べない。なお、シトは釜木だけではなく薪物や柴、炭俵など重いものに向くのだという。モタの構造は、直径十センチ程度の立ち木を、腰のあたりに枝の鉤部を残して、背丈ほどの長さに二本伐る。鉤になった方を外に向け、地面に突き刺す。このとき、まっすぐではなく体を入れる側に少し傾斜させる。そして、次に

鉤のない棒を二本作り、傾斜させた方向から支えるように、簡単に持ち上げられる程度の深さにさし、もう一方の端を柱になった棒の鉤に立てかける。これでモタが完成したことになる。モタの材料としては、栗が最も良いが、特別にこだわらず、釜木の近くのもので済ませたという。このようなことから、炭を焼いた地域で、イタシトを調査すると、まるで一つのセットとして話されるのである。

2 背負い袋

形態的には、網袋や布製のジョウジなどのように、袋部とその両端につく紐からできていて、口の方の紐を片方の肩越しから、底部の紐を脇下から出して胸前で結ぶものがある。これはマタギなど山仕事の人々の弁当入れや旅に出る際の貴重品入れなどとして用いられてきた。一方、一般にコダシと呼ばれる背負い用具があり広く使用されてきた。館蔵資料のなかでも最も数多く収集されてきた。例示したように、腰に結びついたり、背に負うなどして用いられる。また、負う場合でも、じかに負ったり、背中当てやケラの上から背負うなど、その時々 conditions に応じた組み合わせがある。

コダシを形態から区別してみると、ほぼ二種類になる。ひとつは、扁平で、底の編みはあっても座りのないもので、ものを入れる口も袋のように広げながら用いるもの、もうひとつは、立体的で、底部を幅広くとり、座りが良く、口縁部には縁編みが施され常に開いているもの、である。前者はより袋に近く、後者はより籠に近いものといえよう。これを材質からみると、前者では細い縄を用いて編み上げたものが多く、縦長と横長に分けられる。一般には横長形式が多い。縦長形式のもの、スカリやタテコダシなどと呼ばれ、マダ（級の木）皮やブドウ皮で編んだものが多いが、館蔵資料のように縄製のものもある。タテコダシは縦長のコダシということで、スカ

リと同じものである。いずれも、山子やマタギが道具や弁当を入れ、背負い歩いたものである。後者では、さまざまな樹皮が用いられる。ブドウ・アケビ・杉・マンタンブ・トヅラなどの皮や蔓が多い。これらは、編み上げる際に適度の湿気を与えることによって加工しやすくなり、仕上がるにつれ乾燥し形が固定する性質をもつ。そのため立体を維持しやすいものの、縄製コダシのように折れや曲げには適しないものでもある。この点も籠に近い性質と思われる。それに比して、袋に近い扁平なコダシは、場合によっては折りたたんで持ち運びができ、必要に応じて取り出して使用できる便利さがある。とともに、詰め込む量にあわせてふくらむなどの融通性もあるのである。いずれにせよ、これらは、腰に下げることが背に負うこともできるが、概して荷が重ければ重いほど、形態が大きければ大きいほど、背負う形式となる。大きいものは後掲の整理表では、杉皮とブドウ皮製が知れる。これには手提げ用の紐がつけられ、山子が、腰鉈や鋸、手入れ道具箱、弁当などをいれ歩き、手籠に似た使い方をしたとともに、場合によって、小脇に抱えたり背負ったりすることもあった。これら大型のものは、網代編みが多く、縁かがりは矢筈巻縁となっている。

材料としての樹皮の採取には、特定の時期が指摘されている。たとえば、由利地方の場合、アケビ蔓は、八月ころ採取し陰干しし、それを冬まで保存しておく。農閑期になってから編みの仕事にかかる。陰干したものを水に浸し、柔らかくしてから編み始めるというのである。また、マンタンブの蔓は、春から秋にかけて採取し、皮を剥いでから割り、中芯を取り除いて編み材とする。直前に水に浸すのは、アケビ同様である。なお、コクワやマタタビの場合は2~3年もの蔓を採取する。葉落ち後から芽吹きまでの、樹勢の衰える期間に採取し、水の中に漬けたりして乾燥

しないように保存しておく。そして、水分が抜けないうちに一気に仕上げる。そのため人によっては、厳冬期に火の気のない、湿気が多い風呂場で、午前1～2時ごろに作業をするほどである。

つぎに、ここでは「背負い袋」類として納めておくが、コダシよりも一層立体的な構造を持つニダラ（荷俵）が挙げられる。これは他にナダラ、ヨコダワラ、フゴとも称され、直方体に形成されている。各面共に俵編みからなり、蓋にあたる天部は一側面部の編み伸ばしによってできている。ほとんど藁製で、大型のものは、根曲がり竹を割った、力竹で補強するなどしている。これは、山仕事の人がおノやダイキリなどを入れたり、コダシよりも大量にものを運ぶときに用いた。より小型のものは、藁製ばかりでなくガツギやガマ製もあり、保温に適したものとして知られている。冬期間山働きに出る際、飯や弁当などを入れる、保温用として用いられるところから、ママダラという地域もある。この場合、なかに藁屑を入れ、保温効果を高めることもあった。

3 背負い籠

カゴ、ショイカゴと呼ばれる。館蔵資料としては、4点認めることができる。イタヤ製1、アケビ蔓製1、竹製2で、長方体型と寸胴型に分けられる。このなかで、アケビ製は前述したコダシ型の大型とみなし得るものでもある。また、竹製の1点は、製作地の不明のもので、使用地・者の明らかな資料である。これは、製作年も古く、地元のものには見られない精巧な作りである。各面は真蔭目編み、内側に渋紙を貼り、底に交差した桐材と四隅にも同じ桐材の柱を設け、そのなかに寸胴の竹籠を据え置くという形態である。そして背に当たる部分には、縦に一枚の板をあて、そこから肩紐が出ている。また、蓋が金具で留められている。古い商家で使用されていたも

ので、在郷を回り歩いた時に帳簿などを入れたものと伝えられている。地元の竹製のものは、別に汽車カゴとも称し、行商の人達がよく用いたところからの命名と思われる。これは、底が四つ目筏底で各面が真蔭目編み、材は、根曲がり竹を主とし、口縁や真蔭目の縦芯にマダケの力竹を組み入れ、ところどころに籐を用いて補強と装飾的な配慮をみせている。また、側面口縁部には紐のかかり穴を設けている。これらには帯状の担ぎ紐が結ばれる。岩城町亀田は、竹籠屋が多くいたところとして知られているが、ここでは、マチヨイカゴと称して、在方の人々が亀田に用達に行く際に用いたという。なお、イタヤの背負い籠は、口縁が千段巻縁で各面・底ともに菱網代である。

4 背負い梯子

ショイコ、ハシゴ、ショイバシゴなどいい、館蔵資料は2点と少ない。どちらも、いわゆる無爪型で、うち1点は裾の部分にゆるやかな湾曲部を持っている。背にあたるころには、藁縄やブドウ蔓を横に巻き込んでいる。荷縄とともに用いる。

5 背負い箱

モッコ、ハコモッコ、ショイモッコなどといわれる。形態的には二種類あって、一つは台形を逆さにした形のもので、口縁部が大きく広がり、底部が狭くしぼまる。そして、構造上は、口縁部がものを入れる口で、底部が出し口になっていることである。底部は、長辺の、背にあたる一辺のみ蝶番構造になっていて、もう一辺には一本の紐が付き、この紐を引いたりゆるめたりして、ものの出し入れするものである。底部が釘づけされている場合は、上体を折って肩口から、口縁部から出し入れされる。もう一種は、縦長の箱形で底・口縁とも同じ寸法のものである。これには普通は、底部の開閉構造はみられない。前者は

一般に沿岸地方に分布するもので、後者は内陸地方に多い。前者の、沿岸部での分布傾向から、北海道の鯨漁場からの移入・伝播とみられていて、本県ではハタハタ船などからの陸揚げのほか、堆肥運びや土砂・バラス運びにうってつけの道具として使われてもいる。後者はもっぱら、堆肥・土砂運びとして用いられている。

この他、小間物行商用として、何段もの小引き出しを設けた背負い箱がある。これには肩掛け紐が付いている。

6 背負い籠梯子

ネッコショイ、ショイモッコ、カゴモッコ、フラモッコ、マクサモッコ、マクサアライカゴなどの名称をもっている。形態は、縦に長かったり横に広がったりするものの、基本的には碗型である。この形を作る材料は、根曲がり竹や雑木柴で、それらを曲げて曲面の支えとし、さらにその周囲に針金や藁縄を巻いて整えている。そして、これに直接肩掛け紐をつけたり、別に梯子状の背当てを取りつけて使用するのである。用途は、田植え時の苗運び、堆肥運び、堆肥づくりや飼馬の草刈り用で、特にマクサアライカゴは、その名のご

とく、朝草刈りの際には、濡れて土が付着するためモッコごと流れ水に浸し洗うことができたため、重宝がられた。概して、曲面の縄掛けをびっしり、透き間なく掛けたものは堆肥運びなどに用い、おおざっぱに掛け渡したものは、草運びに適したものである。

おわりに

以上が、館蔵資料のうちの、背負い運搬具のおおまかな分類案である。これにより、これまでの収集状況が知れるとともに、今後の収集についても展望をもち得たように思う。

ところで、一つの分類案に拠る限り、どうしても、他との関連あるいは共同して一つの作業にあたるような資料については、そうした複合性をいかにして表すかが問題になる。ここでは特に、イタシトとモッタとのかかわりに注目して記してみたが、今後こうした複合あるいは共用の部面を念頭に調査してみたものである。

参考文献

- 磯貝 勇 1971 日本の民具 岩崎美術社
外崎純一 1978 青森県における背負い運搬具の諸形態(『物質文化』31号)



山作業(女子)の着装例

[長手拭・ジバンコ・カンベ・手甲・荷縄・前垂れ・モンペ・ハバキ・ワラジ]



農作業の着装例

[編み笠・網袋・日ごも]

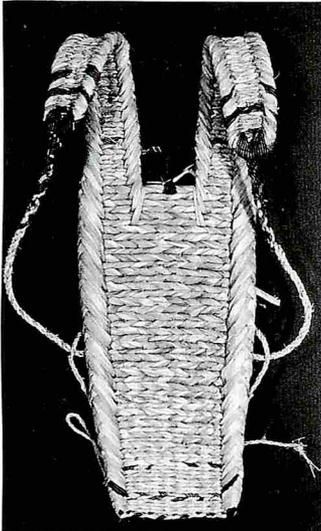
■主な背負い運搬具■



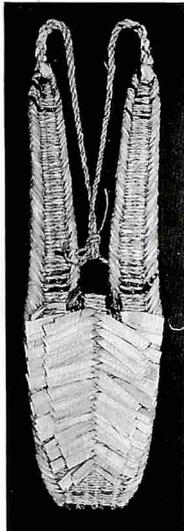
1 ニナ 西木村



2 ニナ 昭和町



3 セナカアテ 六郷町



4 セナカアテ 西木村



5 セナカアテ 昭和町



6 同前 荷面



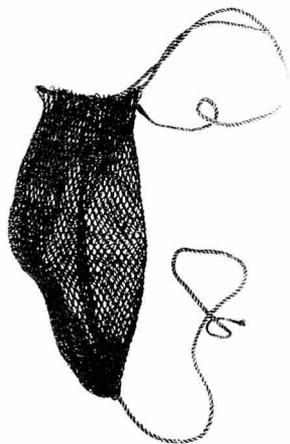
7 セオイイタ 秋田市



8 同前 荷面



9 同前 ヤシマ



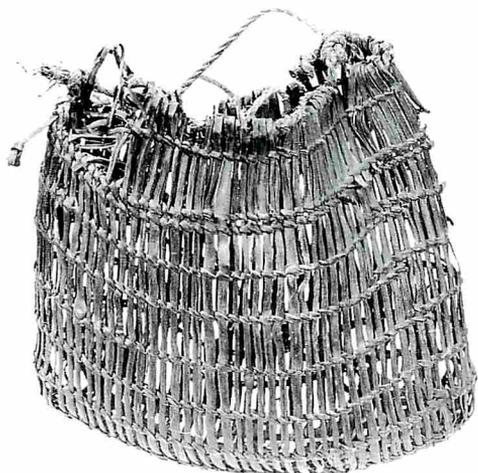
10 網袋 秋田市



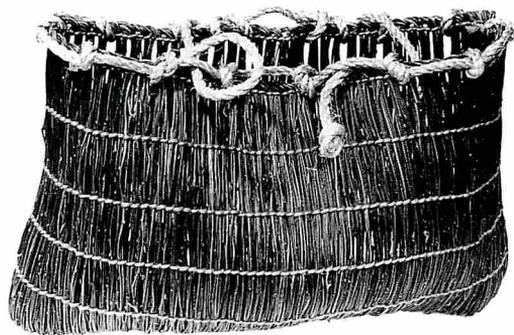
11 クラゲァ 阿仁町



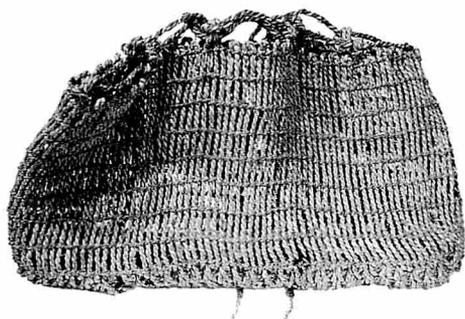
12 タテコダシ 鹿角市



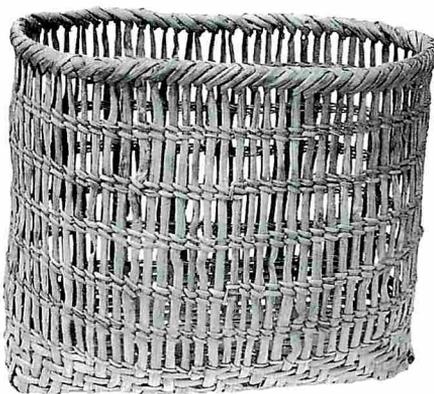
13 コダシ 鹿角市



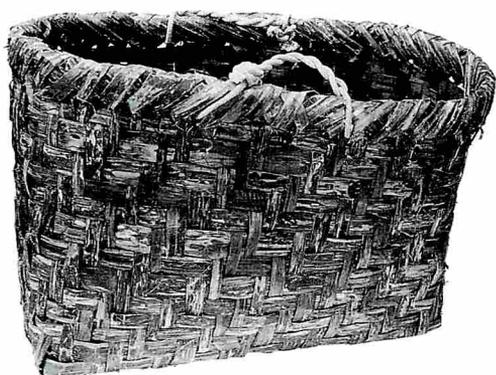
14 コダシ 八森町



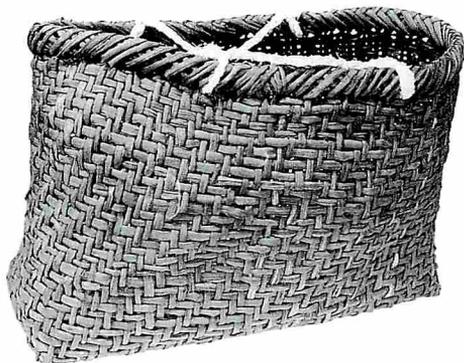
15 コダシ 鳥海町



16 コダシ 森吉町



17 コダシ 山本町



18 コダシ 山本町



19 ニダラ 秋田市



20 ナダラ 八森町



21 ショイカゴ 六郷町

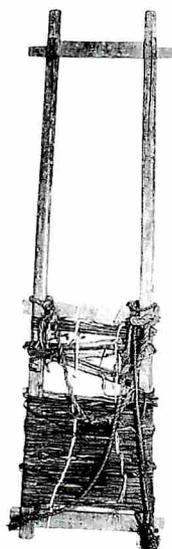


22 ショイカゴ 角館町

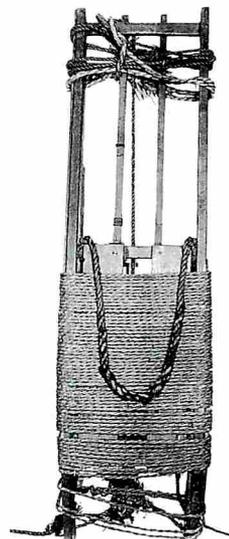
館蔵資料にみる背負い運搬具の諸形態



23 ショイカゴ 秋田市



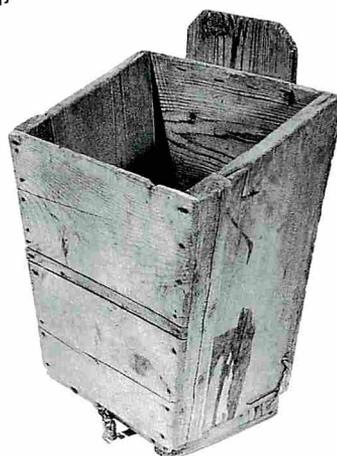
24 ショイコ 鹿角市



25 セオイハシゴ 田沢湖町



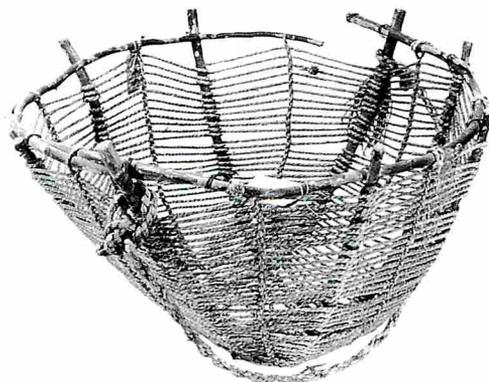
26 ショイバコ 雄勝町



27 イタモッコ 秋田市



28 セオイモッコ 秋田市



29 マグサアライカゴ 秋田市

表 背負い運搬具一覧

型	名 称	収 集 地	材 質	寸 法 (cm)	写 真
縄	ミナ	秋田市	ワラ	320	
	ニナ	昭和町	ワラ	2 ヒロ	2
	ニナ	西木村	ワラ、木綿布	3 ヒロ半	1
	ニナ	由利町	ワラ	604	
	ネコゲラ	由利町	ワラ、裂き紐	82/21/ 6	
	ネコゲラ	由利町	ワラ、裂き紐	82/21/ 6 /	
	セナカアテ	昭和町	ワラ、ビニールムシロ、 ビニールテープ、合板	9 /45/71	5、6
	セナカアテ	昭和町	ワラ、ビニールムシロ、 ビニールテープ、合板	10/42/67	
	セナカアテ	秋田市	スゲ、布裂き紐	3 /31/80	
	セナカアテ	秋田市	ゴザ、杉皮、布裂き紐	8 /35/87	
	セナカアテ	鳥海町	カツギ	6 /25/95	
	セナカアテ	西木村	ガマ	8 /25/89	4
	セナカアテ	大館市	ワラ	8 /37/140	
	セナカアテ	六郷町	ワラ	6 /30/95	3
	セオイイタ	秋田市	杉	5 /27/46	
	セオイイタ	秋田市	杉	4 /24/41	7、8、9
	セナカデ	五城目町	杉	4 /22/45	
	セナカアテ	秋田市	杉	28/ 3 /52	
	セナカアテ	秋田市	杉	46/27/ 3	
	ワラシト	昭和町	ワラ、ビニールムシロ、 ビニールテープ、合板	9 /43/67	
袋	アミブクロ	秋田市	麻紐	45/13	10
	ジョウジ	羽後町	麻布	79/33	
	クラゲァ	阿仁町	木綿布	24/80	11
	スカリ	鹿角市	ワラ縄	73/49	
	タテコダシ	鹿角市	ワラ縄	59/44	12
	コダシ	鳥海町	ブドウ蔓	32/22/27	
	コダシ	鹿角市	ブドウ蔓	35/31	13
	コダシ	由利町	ワラミゴ	8 /44/28	
	コダシ	象潟町	アケビ蔓	25/40/24	
	コダシ	秋田市	紙紐	6 /35/26	

館蔵資料にみる背負い運搬具の諸形態

型	名 称	収 集 地	材 質	寸 法	写 真
袋	コダシ	秋田市	ワラミゴ	8/37/24	
	コダシ	山本町	杉皮、合板	60/37/55	17
	コダシ	山本町	ブドウ蔓、合板	19/51/34	18
	コダシ	森吉町	ブドウ蔓	35/41/43	16
	コダシ	八森町	トヅラ	16/43/28	14
	コダシ	森吉町	マタタビ	21/19/19	
	コダシ	森吉町	マタタビ	19/19/18	
	コダシ	阿仁町	アケビ蔓	4/25/20	
	コダシ	八森町	トヅラ	22/31/31	
	コダシ	阿仁町	ブドウ蔓	34/41/38	
	コダシ	鳥海町	ワラミゴ	9/52/32	15
	コダシ	山本町	ガマ	12/33/20	
	ナダラ	八森町	ワラ	11/30/23	20
	ニダラ	秋田市	ワラ	50/28/30	19
	ニダラ	秋田市	ガツギ	50/27/36	
籠	ショイカゴ	角館町	イタヤ	25/42/34	22
	ショイカゴ	六郷町	竹	37/49/32	21
	ショイカゴ	横手市	アケビ蔓	31/46/37	
	ショイカゴ	秋田市	竹・桐・籐	36/41/65	23
梯子	ショイコ	鹿角市	杉、ブドウ蔓、縄	5/44/149	24
	セオイハンゴ	田沢湖町	杉、縄	7/34/122	25
	ショイハンゴ	雄勝町	杉、縄	5/32/122	
箱	ショイバコ	雄勝町	杉板	36/42/86	26
	イタモッコ	秋田市	杉板	21/49/53	27
	セオイバコ	由利町	杉板	27/42/61	
籠梯子	セオイモッコ	秋田市	雑木柴、縄	77/91/58	
	セオイモッコ	秋田市	雑木柴、縄	22/49/51	28
	セオイモッコ	秋田市	雑木柴、縄	27/42/7	
	マグサアライカゴ	秋田市	雑木柴、縄	47/62/58	29